

2003年11月4日(火)

## タイ「地場の市場プロジェクト」中間報告NO.7

2003年4月~10月

日本国際ボランティアセンター (JVC)  
タイ・コンケン事務所 松尾康範

地産地消をすすめる「地場の市場つくり」プロジェクトが始まり4年目に入りました。試行錯誤を繰り返しながらも、プロジェクトは着実に前進しています。村内朝市の次のステップとなる近くの町を巻き込んだ市場が始まったことで、活動は点から面に移行している段階と言えます。

この時期に、第一フェーズの達成状況を知り、今後に向けてプロジェクトを整理していくために、2002年9月にプロジェクト中間評価を開催しました。その中間評価報告書に関しては、かなり長文であるため、短くまとめたものを皆様支援者への中間報告NO.7としてお送りします。これまで3年半の活動をまとめた内容となっていますので、ご一読していただければ幸いです。

引き続き「地場の市場づくり」プロジェクトのご支援をお願いいたします。

### プロジェクト基礎資料

#### 1. 各村の基礎資料及び朝市の状況

<コンケン県シーチョンブー郡シーチョンブー区コークスーン村&コークパークン村>

村の世帯数：425世帯、1637人(2村)

朝市開始日：1996年11月~、リニューアル2001年11月~

プロジェクト協力者であるヌーケンがアジア農民交流センター(AFEC)の招聘で日本の農村を訪問し、それがきっかけで96年に村の朝市が始まる。コークスーン村とコークパークン村が交差する小さな4つ角で朝市が始まった。しかし、99年に雇用創出を目的に全国の各区(タムボン)に約10万バーツの政府からの資金援助(宮沢基金)がなされ、この地域ではその資金を利用し、コークパークン村の端の方に屋根付きの建物が立てられ、朝市もそこで開かれるようになった。そして、その屋根付きの建物には外からの工業製品が並べられ、その脇の敷地に置かれている農作物に関しては、たくさんの作物が並べられてはいるが、その半分近くが外からの作物となった。2001年2月にプロジェクト側が主催した1年を総括するミーティングでの話し合いで、村人による本来の市場の意義を再考し、村人による市場の再開の準備をすすめた。

2001年11月29日、朝市開催5周年を記念する日に再開し、現在毎日の小さな朝市が、

外からの業者なしで開かれている。(火曜日のみ外からの業者を交えた市場)活動のヒントになった村だが、メインの活動地がポン郡にあるため、この村との交流は、大きなワークショップ及び見学会が中心となり、村へのフォローアップは少ない。

#### <コンケン県ポン郡ペックヤイ区ノンテー村＆ヤナーン村>

村の世帯数：ヤナーン村：145世帯、720人、ノンテー村 70世帯、313人

朝市が始まった日：1999年11月

プロジェクト調査段階でヌーケンの村の朝市を見学したことがきっかけで村の朝市が始まった。小さな朝市だが毎日開催するという望ましい形で運営されている。1年目に村の訪問を重ねるなかで村の問題も見えてきた。農業グループ、貯蓄グループ、織物グループなどこの村には10以上の住民グループがあるが、そのどれもが統一性に欠け、村の活動としてのまとまりがない。そのことを少しでも改善することを配慮し、2001年2月3日、コンケン大学内にある農村開発研究所(RDI)スタッフのウィチアン・センショート氏(今回の中間評価参加者の一人)を講師として招き、村のお寺で集会を開いた。これまでにはプロジェクトの活動がある場合、まずはその話しをサナンさんのいるノンテー村側に伝え、そしてノンテー村の村人からヤナーン村の仲間たちに話しを持っていく、という形態をとっていたが、偏りをなくすためにヤナーン村にも同時に話し掛けるように心がけるようにした。そのため女性グループの参加が強まった。以前朝市委員会は、4人のうち3人が男性だったが、新しく再編されている朝市委員会は、女性の数を多くするよう調整している。朝市に関する会議には女性の参加数が多くなっている。この村では、村の共有地に森を回復させながら、野菜づくりをするという面白い活動が取り組まれているが、野菜の売り先があるため、村人はこの活動に力を入れている。しかし、無農薬農業という意識は低く、いまそれを改善する段階にいる。

#### <コンケン県ポン郡カオニイウ区 ノンブア＆チャイパッタナー村>

村の世帯数：ノンブア 97世帯、486人、チャイパッタナー：96世帯、503人

朝市が始まった日：1999年2月～

調査を始めた99年5月の時点で、この村に既に朝市があった。その朝市の活動状況を学ぶためにこの村を調査対象地域に取り入れた。日曜日だけの小さな朝市が細々と取り組まれていたが、そこに行行政区レベルの組織であるオーポートー(行政区運営機構)が入り込み、村レベルではなく、その上の行政区レベルの市場を開くことが提案され、2000年9月に実際にその市場が開催された。しかし、その朝市は村人による市場というよりも、普通の町にある雑貨などを置く定期市となんの変わりもなく、結局2回ほど開催しただけで中止になり、それと同時に村の小さな朝市も消滅してしまった。こうした行政区レベルの活動との関係を配慮し、我々はその動きに少し距離を置いて村に関わっていたが、その後少しずつその調整をし始めた。2002年1月には、村人による本来の朝市に興味のある村人数人をノンウェンソーケプラの朝市に見学に連れていった。そのことがきっかけで、小さいけれども私たちが本来目指す朝市が再開された。現在は、現在毎週土曜日の市場が毎週開

催されている。

**<ノンウェンソーケプラ村&ノンウェンコート村&ノンヤプロン村>**

村の世帯数：ノンウェンソーケプラ村 130 世帯、631 人、ノンウェンコート村 94 世帯、434 人、ノンヤプロン：57 世帯、354 人

朝市が始まった日：2000 年 10 月～2002 年秋頃に中断、2003 年 9 月 17 日に再開。

プロジェクトが始まった 1 年目の 2000 年 9 月、ノンヤプロン村にて、3 村のリーダー参加のワークショップ及び、ノンテー村朝市見学会の振り返りの時間をもった。その後何度も朝市開催準備会議を開き、10 月に週 3 回の村の朝市が始まった。村人による小さな加工品を工夫して売るなど、その後一年以上は、プロジェクト地のなかで特に活気のある市場になり、多くの見学者も訪れた。しかし、2002 年の秋に朝市委員会のリーダーであるウトンさんが村長選に破れ、その頃から朝市が絶えてしまった。その後に、ポン郡のまちの市場が始まることになるが、村のリーダーは他の村に比べても積極的にその活動に協力している。

中間評価後の 9 月 17 日にめでたく村の朝市再開。開催日は水曜、土曜の週二日だが、簡易型の屋根が村人共同で作られ、毎日朝と夕方には、そこで定期的につみれ団子焼きを販売する人がいて、その人に預けたい人はいつでも農作物を預けることが出来るようになった。

**<ソックノックテーン村&ソックノックテーンパッタナー村&ソックカムノーアイ村>**

村の世帯数：ソックノックテーン村：135 世帯 783 人、ソックノックテーンパッタナー村：141 世帯 886 人、ソックカムノーアイ村 116 世帯、623 人

朝市が始まった日：2000 年 9 月

プロジェクト波及村。ヤナーン村 & ノンテー村の朝市をヒントに 2000 年 9 月に朝市が始まる。それ以降、村人のリーダーがプロジェクトの活動に参加するようになった。村人の何人かがオルタナティブ農業ネットワークの会員もある。ポン郡まちの市場のメンバー。しかし、ポンの市場がはじまるとき、村人はそちらに目を向けるようになり、村の朝市の活動を止めてしまった。

**<ノンウェンナンバオ村&ノンウェンナンバオパッタナー村>**

村の世帯数：ノンウェンナンバオ 170 世帯、900 人、ノンウェンナンバオパッタナー 130 世帯、636 人

朝市が始まった日：1999 年 9 月

プロジェクト波及村。1999 年に自分たちの力で村の朝市を開いた。（きっかけはプロジェクトと直接関係ない）現在でも 10 人から 15 人の生産者が中心になり、毎週土曜日に開催している。洋服や日常品やプラスチック製品を販売する業者が 2 人ほどいるが、自分たちの規約をしっかりとつくることで、それ以上そうした業者が増えないように心がけている。町から 10 キロ以上も離れていることと、日常品として外からの物も必要という現実から、

二人の業者にだけは販売を許可している。2002年11月にポン郡のまちの市場ができた時点から、オルタナティブ農業ネットワーク内ということで地場の市場の活動に参加している。村の活動として、相互扶助グループ、お蚕グループ、織物グループ、有機堆肥つくりグループ、玄米つくりグループ、村の朝市グループ、複合農業グループなどがある。複合農業グループでは、数人のリーダーが中心となり複合農業が学べる場を他の村人たちにも提供している。

#### <クンマウ村&スワンモン村>

村の世帯数：クンマウ村：192世帯、約500人、スワンモン村：156世帯、約600人

朝市が始まった日：2001年1月～

プロジェクト波及村。この村の朝市は2001年1月に始まった。その一ヶ月前に村の数人の男たちが、プロジェクトの成果として4番目に始まったノンウェンソーグラ村の朝市を見学したことがきっかけである。そして彼らはその様子を村の会議で報告し、村の女たちの賛同を得て朝市が始まることとなったのだ。プロジェクトではフォローアップをしたが、短期間で勢い良く始まったこともあり、その頃は朝市の意味が明確ではなく、外部からの業者が数多くみられた。しかし、その後村人は、外の業者からの商品を出来る限り買わないように心がけたことで、業者の売れ行きが悪くなり、業者はいなくなってしまった。現在でも週2回の活気ある朝市が開かれ、自分たちでつくったシャンプーなどを販売する直売所の活動にもつながった。ポン郡の町から15キロ以上も離れていることと、村の規模が大きいこともあり、ポン郡の町の市場には参加していない。この村では、朝市が開催される一年前から、公共貯蓄池の周囲を利用した無農薬野菜プロジェクトが取り組まれていたが、当初はそこで出来た作物の販売先がなかったために、活動が進まないでいた。しかし、村の朝市という販売先ができたことで、村人たちは野菜作りの活動にも熱心になっている。

## 2. ポン郡“むらとまちを結ぶ直売市場”について

活動3年目にあたる2002年度は、村内市場の次ぎのステップにあたるポン郡の町における直売市場をどのように形成していくか、ということに関する話し合いの場を繰り返し重ねてきた。これはプロジェクトを始めた当初から構想していたことで、村人たちの気持ちが一致し、村人からの提案として、その市場はスタートすることとなった。

その第一回目は2002年11月4日。開催地は活動地域の中心となるコンケン県ポン郡の郡役所敷地内。地場産・無農薬を謳い文句に毎週月曜日の開催となった。一般的な村人たちが開く市場に郡役所の敷地を使用することは異例なことと言える。プロジェクトではこれまで積極的にポン郡行政や郡長、町の開発に関わる様々な立場の人を巻き込むことを意識して活動してきたことが、いい結果として実った。市場には、村の小さな朝市と同様に村人自身が作った野菜や加工品が並べられ、町の人たちが楽しそうにその商品を買うという新しい風景がポンのまちにつくられた。村の朝市は、村で生産された作物をまずは村内で消費することを目的として、資源の村内循環を試みているが、町における市場は、村での

余剰作物を近くの町の人々に直接届け、村人の収入向上だけではなく、同じ地域に住む町の消費者の健康を守ることも目的としている。

**<ポン郡における直売市場参加者数> 5 地域 11 村**

	緑	黄	青	合計
ノンウェンソークプラ村 & ノンウェンコート村	6	5	35	46
ヤナーン村 & ノンティー村	2	-	60	62
ノンブア村 & チャパッタナー村	6	1	27	34
ノンウェンナンバオ村 & ノンウェンナンバオパッタナー村	4	1	20	25
ソックノックテーン村 & ソックカムノイ村 & ソックノックテーンパッタナー村	2	-	20	22
	20	7	164	191

**<町の市場の構成及び規約>**

開催：毎週月曜日

場所：ポン郡役所敷地内

運営主体：市場委員会（5 地域から各 2 名 + マネージャー 2 人）

規約：販売者はこの市場の委員会に登録されている人でなければならない。販売者は一区画（1 m<sup>2</sup>）あたり 5 バーツを維持費として市場委員会に支払わなければならない。

A と認定された人は、一年以上完全無農薬農業（無農薬・無肥料）を継続してきている。

B と指定されている人は、農薬は使用していないが、化学肥料を使用。半年以内に完全無農薬に切り替えていく意志のある人。A、B 両者とも、委員会の巡回監査をパスしなければ、その位を認められない。（A、B 以外の生産者が、自然から採取した魚や草木に関してはもちろん無農薬だが、自分が生産した作物が無農薬でなければ、A と B に認めることは出来ない）販売終了後は必ず自分のゴミを片付ける。

定期的な支出：マネージャー報酬 100 \* 2 = 200B / 1 回

**ポン郡直売市場の売り上げ例（5 地域から 3 人 = 15 人）**

氏名	認定	3/31	4/7	4/21	5/5
----	----	------	-----	------	-----

**<ヤナーン & ノンティー村>**

ヌーアエン	C		1,700	1,200	1,350
トーンシー	C			570	100
ヌーチー	C				350

**<ノンウェンナンバオ村 & ノンウェンナンバオパッタナー村>**

ピーサマイ	A	150	300	350	300
リィヤップ	A	460	400	300	-
ソムチット	C	200	100	300	450

<ソックノックテーン村&ソックノックテーンパッタナー村&ソックノックテーンパッタナー村>

ハー	C	350	300	400	300
ブンパーーン	C	400	300	100	300
サガー	C	270	350	200	-

<ノンウェンソークプラ&ノンウェンコート>

パロピム	A	250	500	-	-
プアリアム	A	-	-	-	300
プラピット	C	-	100	150	250

<ノンプア&チャイパッタナー>

トーンプーン	B	300	250	300	300
ソムワーン	A	-	280	-	150
ブントム	A	-	200	-	500

## これまでのプロジェクトの活動及び役割について

<プロジェクト立ち上げとスタッフ>

1999年に「地場の市場プロジェクト」を立ち上げるための調査を開始した。その調査対象地域として、朝市が始まっている2地域と、朝市に取り組んだことのない村2地域、計4地域(7村)を選択した。そしてただ単に朝市の意義を調べるだけではなく、4地域共同で、村人による地域の市場について交流した。そして幸運にも、調査活動期間中にヤナン&ノンター村に新しい朝市が始まった。

その約8ヶ月の調査の中で、朝市を普及する意味(プロジェクト概要参照)が確認され、プロジェクト計画書をJVC東京(PSC)に提出した。

2000年3月にプロジェクトは承認され、5月に松尾がタイ赴任、そして現地事務所(イサーンNGOCOD内)を立ち上げた。その後1年半は、バン(主にフィールド地域担当)松尾(主に運営面の責任)の二人体制でプロジェクトをすすめてきた。その後2001年11月にフィールドスタッフにニバポンさんが入るが、プロジェクトチーム(スタッフ&現地相談役)と相談し、彼女がフィールドスタッフに不適任と判断。彼女自身もその限界を感じていたこともあり、1年も経たずに辞職することになった。

プロジェクト3年目にあたる2002年10月に新フィールドスタッフとしてマヌーンが就任し、ようやくいまの体制となった。また2003年4月からは元イサーンNGOCODの委員長であり、プロジェクトをスタート当初から見守ってくれたサナーさんに正式的な相談役(パートタイム)になってもらった。

<活動1年目>

スタート当初は、イサーンオルタナティブ農業ネットワークなど関係団体との調整や各プロジェクト対象地域の巡回(村を知る)を継続した。一つ目の大きな活動として、プロジェクト相談役である大野さんと西沢さんに協力してもらい、村内ワークショップ(ノンヤプロン村とノンター村)を開いた。その後、まだ唯一朝市の活動がない、ノンヤプロン村で朝市を始めるという動きになり、結果、ノンヤプロン村の本村であるノンウェンソー

クプラ村で朝市が始まった。

活動1年目は、朝市のある村同士がその経験を具体的に交流していけるよう、プロジェクトでは村レベルのワークショップ開催を繰り返した。その活動結果として、クンマウ村やソックノックテーン村で朝市は始まるという波及効果を生んだ。

#### <活動2年目>

2年目の最初の活動として、コラート県ワンナムキヨ無農薬グループとノンジョック農園への見学会を企画する。しかし、準備不足であったこと、目的があいまいだったこともあり、大きな成果にはつながらなかった。次の活動に向け、いい教訓となった。

プロジェクトが始まるきっかけになったコークス・ン村の朝市が外部者による朝市になりかける、など新たな問題（各村の状況を参照）が生まれたため、9月に4地域共同のワークショップを開き、あらためて村人による市場の意味を考える場を設けた。

また、プロジェクトでは、コラート県シーマアソーク自然農園見学、カラシン県の農民リーダーバムルン・カヨターさんの農地に研修会にいくなど、生産面の支援を行った。

また、ネットワークを重要視するタイ社会において、イサーンNGO COD主催の「反グローバリゼーション・イサーンの智慧」集会やその他の地域におけるイベントへの協力も行った。

この年度の後半に、村レベルの次のステップにあたる市場つくりを目指すために、タイ北部チェンマイで村人による市場活動を行っている「インブン」の見学会を開催した。その企画が功を奏して、各村のリーダーたちが、町における直売市場のイメージが明確になってきた。

この二年目は各村のリーダーのネットワーク化を意識して活動し、そのことがポン郡の“むらとまちを結ぶ直売市場”の活動に結ばれた。

#### <活動3年目>

町における直売市場をどのように形成していくか、ということをテーマに各地域からの代表（上記ネットワーク）が集まる話しあいの場を繰り返し重ねてきた。7月には大野さんを招聘し、客観的に活動を分析、評価してもらうと同時に、村人による会議にも参加してもらった。その会議の場に、ポン郡の郡長が参加。ポン郡役所の敷地内に直売市場を開けることを正式に確約してもらった。

2002年11月4日、無農薬・直売をうたった村人による市場が始まった。

プロジェクトとしては、村人のリーダー日本視察、経験交流（スラポンさん&チュアムさん&バムルン・カヨターさんグループ）を12月に実施した。そして1月には私たちの活動のヒントにもなっている山形県長井市における生ごみ堆肥化事業（レインボープラン）の提唱者・菅野芳秀日氏がプロジェクト地域を訪問して、交流会をおこなった。

2月には、昨年と同様にチェンマイのインブンと交流した。

町の直売市場がはじまったため、その3つの交流とも、具体的な活動を持っての経験交流の場となり充実した交流となった。

また同じく2月に、その年の活動の振り返りと今後を話しあう会議を開催し、主に町の直売市場3ヶ月の振り返り、いま抱えている問題を挙げ、その解決方法を考えた。

現在、まちの市場を強化していく活動については、運営面の改善、販売物の品質向上（無農薬を目指す）販売者（登録数191、定期的な参加者100弱）全員への活動に対する理解を得るために交流会を実施している。

また、村の市場に関しては、町の直売市場ができた後に弱まってしまった傾向があるが、その理由を検証し、立て直し計るための話しあいの場を重ねている。

### ＜第一フェーズ活動記録＞

#### ＜1999年＞ 調査活動

12月 調査まとめワークショップ&日本&タイ農民交流

#### ＜2000年＞活動1年目

3月 プロジェクト承認。

5月 松尾タイ赴任、事務所開き

6月 イサーンオルタナティブ農業ネットワーク運営委員会に参加。地場市場プロジェクト開始表明&村回り

7月 JVCスタディーツアー

8月 プロジェクト相談役大野和興氏&西沢江美子氏プロジェクト地訪問

9月 ノンヤブロン村にて、3村のリーダー参加のワークショップ

NGO COD総会。

ヤナーン村&ノンテー村の朝市をヒントにソックノックテーン村にて朝市が始まる。

10月 JCNCA・ARAエクスポートジャーナーと合流。

ノンウェンソーケプラ村にて週3回の村の朝市が始まる。

ノンブア&チャイパッタナー村にて話し合い

11月 コラート県にある加工グループ視察

活動支援グループ「アーシアン」来訪

12月 プロジェクト運営会議。

1月 JVCタイMTG及びステアリングコミッティ。

久留米公民館主催スタディーツアー受け入れ

クンマウ村のリーダーがノンウェンソーケプラ村朝市を見学。

2月 クンマウ村にて朝市が始まる。

RDI ウィチアン氏をノンテー村に招きワークショップ

プロジェクト年次計画会議。振り返りと今後の計画。

JVCスタディーツアー

#### ＜2001年度＞活動2年目

4月 ソックノックテーン村がノンウェンソーケプラの朝市見学&交流。

村人とコラート県ワンナムキヨ無農薬グループ&ノンジョック農園視察。

5月 松尾日本へ一時帰国&ZUZUコンサート in Japan

コンケン県内ヘッド区に複合農業の見学（オルタナティブ農業活動地域）

7月 WE21ツアーライブ

8月 JVCスタディーツアー

9月 コンケンにて活動地4村ワークショップ

10月 コークスーン村の村人、ノンウェンソーケプラ朝市見学&村人と交流（その後11月に朝市を再開）

11月 6地域村人とコラート県シーマアソーケ自然農園見学。

新潟から活動家堀井修さん来訪

NGO COD反グローバリゼーション「イサーンの智慧」集会。村人も参加

ヌーケンの村にて、村人による市場再スタート

1月 JVC代表者会議（松尾日本へ）

JVCラオス一行活動地訪問

ノンブア&チャイパッタナーの村人リーダーがノンウェンソーケプラの朝市を見学。

2月 プロジェクト地域村人チェンマイ（インブン市場）見学

ノンウェンソーケプラ村研修&バムルン・カヨター氏の農地にて堆肥勉強会

JVCスタディーツアー

デックラックティン（地域を愛する子どもたちの会）ヤナーン村にて

3月 年次計画会議

#### ＜2002年度＞活動3年目

4月 カラシン県カヨターさんを訪問「イベント地域の智慧」参加&農地見学  
松尾一時帰国  
6月 プロジェクト支援グループ「アーシアン」来訪  
スリン県女性グループ活動地訪問  
(その後その女性グループは自分たちの地域で朝市をスタートさせる)  
7月 プロジェクト相談役 大野和興氏来タイ&活動評価  
ポン郡の郡長がポン郡における直売市場を支援すると表明  
8月 Z U Z Uコンサート in Japan  
J V C スタディーツアー  
9月 J V C ワークショップ(コンケン)  
10月 マヌーンがフィールドスタッフに。  
事務局長清水さんインターン評価前に活動地訪問  
インターンプログラム評価  
プロジェクト村人と会議(ポン郡まちの市場準備)  
11月 コラート県プラターイの農家に“土”について学びに行く  
N G O C O D 行事に参加(織物&伝統)  
ポン郡の郡役所内にて地場産・無農薬を謳い毎週月曜日の直売市場が始まる。  
コーケスーン村 ノンター村朝市及びポン郡の市場見学。  
12月 チュアムさん、スラポンさん&バムルン・カヨター氏グループ日本農村見学  
1月 レインボープラン推進者 菅野芳秀さんプロジェクト地域訪問  
N J 評価&J V C タイM T G  
チャンマイ・インブン市場訪問・交流  
2月 プロジェクト年次会議。ポン市場開始三ヶ月を振り返って(添付資料)  
J V C スタディーツアー  
3月 J V C タイ年次計画M T G  
デックラックティン(地域を愛する子どもたちの会)

#### <第二フェーズ以降>

#### <2003年度>活動4年目&第二フェーズスタート-

4月 新しい郡長を日本大使館の方と表敬訪問。  
郡長、副郡長、農業事務所スタッフ活動村訪問  
無農薬A・Bと指定された農家を市場委員会と巡回  
5月 松尾日本へ一時帰国  
7月 ポン郡市場委員会運営会議  
J V C ラオス一行活動地訪問  
各5地域の村レベルにおける月例会議の実施と各村の巡回、村の朝市についても話し合う  
8月 市場委員会運営会議。販売者全員参加の研修会(関係者も含め200人以上が参加)  
J V C スタディーツアー&フィリピン農民受け入れ。(別の村)  
9月 プロジェクト中間評価。消費者農地訪問企画第一回。生産者研修第一回。生産者Aノンジョックにて研修会。運営強化研修(委員会メンバー対象)  
10月 フィリピンからのスタディーツアー受け入れ。消費者との交流会(アンケートを元にその対象者を絞る)

## プロジェクトの成果

\*これまでの聞き取り及び評価会議当日より。

### - 経済面の成果 -

村の市場では一回あたり 20 パーツ( 60 円 / タイのラーメン 1 杯分 )の利益があつただけでも、子供の学費に活かせる。

週に一回の町の市場では、300 ~ 500 パーツの売上があるため、月にすると 2000 パーツ近くの売上がある。この市場からの利益が生活の収入に加わったことで、うまく持続していくれば農業収入だけで食べていける。現在のところは借金の急激な減少には結びついてはいないが、借金は増加しなくなっている。将来的に借金の問題は解決できるだろう、という村人からの意見も出されている。

収入増加だけではなく、農薬や化学肥料など農業生産面での支出の軽減にも結びついている。

資源の循環。今まで外から購入していたものも村の市場で購入するようになり、地域でお金が巡回する。最初のうちは、村の外で買ってきた鶏を焼き鳥にして販売していた人が、この市場の目的を理解したことで、村内の地鶏を探して焼き鳥として販売するようなケースも見られる。

### - 生産面の成果 -

何よりも売り先があるため、村人たちは、以前に増して農業生産に力を入れるようになっている。

これまで少量多種つくってきた作物に関して、自分の家の消費、隣近所へのおすそわけ以外は、農地で腐らせてしまったことが多かったが、そうした作物を村の朝市で無駄なく販売することが出来ている。

減農薬、有機農業の促進につながっている。

### - 社会面の成果 -

女性の社会参加がすすむ。朝市が始まった頃、おばちゃんたちは自分の作った作物を知り合いの多い自分の村で売ることに抵抗を感じ、最初は子どもたちを前面に出して販売していたが、次第に自分たちが積極的に販売するようになった。朝市委員会にも女性たちが参加している。

村に憩いの場が形成される。女性だけではなく、子どもや老人も気軽に参加できる。地域が豊かになるということは、様々な層が地域の活動に参加するということである。

村人たちが地域の自立の必要性を感じることができる。

消費のあり方、生活のあり方を見直そうという意識が芽生えてきている。

町の市場ができたことで、これまで繋がりのなかった町の層との関係が出来てきている。

行政を巻き込んでいる。郡の敷地内で市場を開催することで行政が支援してくれている。

「村人の収入向上につながるだけではなく、ポン郡の町に住む消費者の健康を守るこの活動は、町の開発にも欠かせない」と郡長がこの活動を絶賛してくれている。

### - 環境面の成果 -

郡敷地内における地域の市場という特性を持っているため、清掃には気を配っている。販売者はしっかりと自分が出したゴミを清掃してから帰宅している。一般の町の定期市は、その市場が終わるとゴミだらけになるが、この市場終了後は、ほとんどゴミが残らないという異例の市場になっている。

農薬・化学肥料の減少や生態系を考えた複合農業の促進に繋がっていることも、環境面にいい影響を与えていていることになる。

森の再生をめざすきっかけになっている。ヤナーン＆ノンター村では3年前から村の共有地を森に戻す活動を始めた。単に植林するだけではなく、会員制を採って会員が野菜を作りながら、畑の周りに木を植えるという方法で100年かけて森に戻そうとしている。以前にも植林活動を試みたことがあったが、管理する人がいなかつたため、ほとんどの木が枯れてしまった。そこで考え出されたのが野菜づくりを同時にすすめるということだった。野菜づくりに関してもその売り先がなければすすめられないが、当初から村の朝市が販売先としてあった。今では町の直売市場も販売先としてあるため、活動がさらに活発化されている。

### - 波及効果として -

99年の調査をスタートした時点で2地域4村だった朝市が現在では、関わりのある周囲の村だけでも、6地域12村に広がっている。最初の2地域に関しても、途中つぶれかけたが、プロジェクトがフォローアップすることで、活動を継続することができている。

オルタナティブ農業ネットワークの関係で、遠く離れたスリン県からの女性グループが朝市を見学しにきたことがきっかけとなり、地域の朝市が始まった。カラシン県やローエット県など他の地域でもこの活動を参考に市場つくりを始めようとしている。

## 現状の問題点とその解決方法

### 問題点

#### 1. 市場の活動の問題点

##### 1 1 各村の村内における市場

- ・ポン郡のまちの市場ができたことによって村の市場への関心が薄れている。
- ・生産物の不足。
- ・外の物への関心が高まっている（消費文化の混入）

##### 1 2 ポン郡まちの直売市場

- ・販売者のなかで、いまだこの市場の意味を理解していない人がいる。

無農薬の意味を理解していない。無農薬を意識する人は、さらに意識してはじめているが、意識しない人は売れるための農業に走ってしまっている。

- ・市場委員会、生産者、スタッフの連絡調整がうまく機能していない。
- ・市場委員会運営面（各委員の役割分担が不明確）の力不足

## 2. プロジェクトの運営面における問題点

- ・村での活動にもっと力を入れていく必要がある。  
(各村のフォローアップが仕切っていない)
- 計画性を持った活動がこれまで以上に必要。

### その解決に向けて -

- ・上記の問題点に関して、既にそれぞれの村人は気づいてはいるが、活動に計画性がないために実行に移せないでいた。そのため、その解決に向け、個々の問題に関する個別のMTGをこれまで何度か開催し、半年間の計画も作成してきた。結果、例えば村の朝市の活動に關しても、ノンウェンソーケプラ村＆ノンウェンコート村（なくなっていたが再開）やノンブア＆チャイパッタナー村（弱まっていたが強化）の朝市はすでに通常の朝市に戻っている。
- ・一番の課題である農作物の質を向上する（有機農産物）ということに関しては、いきなり全員ではなく、各村10人程度の人が確実に有機農産物をつくることを計画し、しっかりととしたモデルをつくることに力を入れている。例えば、ノンブア＆チャイパッタナー村では21人の村人が中心となり、村の共有地に野菜づくりを始めた。いまは整地している段階で、堆肥づくりを同時にすすめている。（この堆肥づくりはノンジョック自然農園に研修に行って学んできたものを実践している）10月の末には種を植える。
- ・市場運営委員会の役割を明確にする話し合いを増やして、（すでに何度か開催）規約の意味を明確にしていくことで問題を解決していく。
- ・消費者との話し合いの場をもち、消費者のニーズを知り、そのニーズに応えていくことで、問題を解決出来ることが確認されているので、消費者交流の場を持つことを計画に入れる。（11月4日現在、すでに2回交流会を実行）

### <ポン郡町の消費者70人アンケート>

2003年10月末日

#### 1. ポン郡“むらとまちを結ぶ直売市場”への理解度は？

- 無農薬野菜を販売する市場と理解している。75%  
単に新鮮な野菜を販売しているところ。25%

#### 2. 販売している商品が無農薬であることを信じますか？

- 信用している。45%  
ほぼ信用している。50%  
分からぬ。5%

意見：1.販売者の中に、他から買ってきた商品を販売している人が数人いるということを聞いているので、その人たちに関しては信用していない。しかし、実際にこの市場で野菜を買っている経験から言うと、ポン市が開いている町の市場や一般的の商品に比べ、品質がよく、安全である。

2. この市場で買う野菜は、虫がついたりしていることもあるが、一般的の市場で買う商品に比べ、おいしいし、元気があって長持ちする。

3 . 市場の場所、価格、日時に満足していますか。

非常に満足。 30%

普通。 68%

満足していない。 2 %

意見：少なくとももう一日、市場を開催する日を増やすべきだ。そしてもし増やすのであれば、仕事のない休日してくれればありがたい。

4 . 市場で購入した商品の使い道は。

平均すると、この市場で買った野菜等を使って、自分で料理する割合が週に 3,4 回。

5 . この市場に毎週買いに来ていますか？

毎週来ている。 25%

毎週ではない。 75%

以上